

明海大学 浦安キャンパス

2025 年度 学修成果等アンケート 分析結果

— KPI : Q6 満足度 83.1% / Q4-4 成長実感 81.4% —

IR 推進本部

2026 年 6 月

1. 調査概要

(1) 調査目的

学生の成長実感・満足度及び学修に対する意欲等を継続的に把握し、学修成果及び教育成果を可視化することにより、学生が自身の学修内容や成果を振り返り次の学びに繋げるため、また次年度以降の教育改善を図るために実施した。

(2) 調査対象・実施概要

項目	内容
調査対象	全学部在学生（浦安キャンパス）
調査期間	2025 年 12 月 17 日（水）～ 2026 年 1 月 31 日（土）
調査方法	manaba の「アンケート」機能を使用した Web アンケート（任意回答）
有効回答数	1,524 件 / 対象 3,191 名（2025 年 12 月 1 日現在・休学者除く）
回収率	47.8%（前年度 54%）
KPI	Q6「大学での学びに満足している」・Q4-4「大学の学びによって成長を実感している」

(3) 設問構成

本アンケートは問 1～問 7 の 7 設問群（うち問 5 は自由記述）から構成される。以下に各設問の概要を示す。

問番号	内容	尺度	選択肢
問 1	授業の質（教え方工夫・授業外指示・コメント返却・GW 機会・意見交換・TA 指導） 6 設問	4 段階	①よくあった～④なかった
問 2	体験活動の有用性（インターンシップ・ボランティア・海外留学・英語授業） 4 設問	5 段階（経験なし含む）	①有用だった～⑤経験していない
問 3	能力習得感（専門知識・仕事スキル・文献分析・論理文章・話す力・外国語力・数理 DS・問題解決・協働力・幅広い知識・異文化） 11 設問	4 段階	①身についた～④身につけていない
問 4	学び全体（目標意識・教育改善・教職員熱意・成長実感） 4 設問	4 段階	①そう思う～④そう思わない
問 5	学修時間（出席・卒論・授業関連・自主学習） 4 設問	5 段階	①30 分未満～⑤3 時間以上
問 6	大学での学びへの満足度（KPI） 1 設問	4 段階	①そう思う～④そう思わない

問7	自由記述	-	-
----	------	---	---

※ ポジティブ回答率：各設問の上位 2 択（①②）の合計比率として算出。以下の分析はすべてこの比率を用いる。

※ 問 2（体験活動）は「経験していない」回答者を除いた有効回答で集計。

2. 回収率

(1) 学年別回収率

学年	1 年	2 年	3 年	4 年
対象者数	769 名	778 名	823 名	821 名
回答者数	630 名	436 名	233 名	225 名
回収率	81.9%	56%	28.3%	27.4%

全体回収率は 47.8%（有効回答 1,524 件 / 対象 3,191 名）。学年別では 1・2 年生の回収率が高く、3・4 年生は相対的に低い傾向が続いている。

(2) 学科別回答者数

学科	日本語	英米語	中国語	経済	不動産	HT	口腔保健
回答者数	152 名	163 名	74 名	515 名	244 名	211 名	165 名

※ 3 年生・4 年生の回収率向上が引き続き課題。特にゼミ・授業内での実施促進が有効と考えられる。

3. KPI：満足度・成長実感の概要

本調査では「Q6 大学での学びに満足している」および「Q4-4 大学の学びによって成長を実感している」を主要指標（KPI）として位置づける。両指標は相互相関 $r=0.60$ と強く連動するが同一ではなく、異なる側面を測定している。

（1）全体ポジティブ率

指標	ポジティブ率	前年度比
Q6 大学での学びに満足している	83.1%	※前年度データ参照
Q4-4 大学の学びによって成長を実感している	81.4%	※前年度データ参照

（2）学科別ポジティブ率

指標	日本語	英米語	中国語	経済	不動産	HT	口腔保健	全学平均
Q6 満足度	86.1%	79.5%	94.6%	82.5%	77%	90.5%	80%	83.1%
Q4-4 成長実感	79.6%	81%	94.6%	76.5%	80.3%	87.2%	87.3%	81.4%

Q6 満足度の最高は中国語（94.6%）、最低は不動産（77%）で学科間の差は 17.6pt。Q4-4 成長実感の最高は中国語（94.6%）、最低は経済（76.5%）で学科間の差は 18.1pt。

日本語・経済では満足度が Q4-4 成長実感を上回る傾向があり、口腔保健では逆に成長実感が満足度を上回っている。

（3）学年別ポジティブ率

指標	1 年	2 年	3 年	4 年
Q6 満足度	82%	80.5%	84.4%	89.7%
Q4-4 成長実感	80.3%	80%	82%	86.7%

※ 色の凡例：緑（90%以上）・青（80～90%）・黄（70～80%）・赤（70%未満）

Q6 満足度は学年進行とともに上昇する傾向があり、4 年生（89.7%）が最も高い。Q4-4 成長実感も同様

の傾向（1 年 80.3%→4 年 86.7%）だが変化幅は Q6 より小さい。

4. 問 1 : 授業の質

「大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか？」（4 段階：①よくあった～④なかった）の各設問についてポジティブ率（①+②）を集計した。

（1）全体ポジティブ率

設問	1-1 教 え方工夫	1-2 授 業外指示	1-3 コ メント返 却	1-4 GW 機会	1-5 意 見交換	1-6 TA 指導
全体	91.9%	83%	68.6%	88.2%	77%	63%

授業の質に関しては「1-1 教え方工夫」（91.9%）・「1-4 GW 機会」（88.2%）・「1-5 意見交換」（77%）が高い。一方「1-6 TA 指導」（63%）は最も低く、配置のある授業が限られていることが反映されていると考えられる。「1-3 コメント返却」（68.6%）と「1-2 授業外指示」（83%）は改善の余地がある。

（2）学科×学年別 クロス集計（1-1 教え方工夫）

学科	1 年	2 年	3 年	4 年
日本語	95.6%	96%	91.2%	87%
英米語	95.6%	85%	96.8%	87.5%
中国語	100%	95%	100%	100%
経済	89.5%	91.5%	90.5%	93.6%
不動産	94%	86.5%	96.6%	88%
HT	95.4%	94%	100%	100%
口腔保健	75.5%	91.9%	90.9%	91.2%

（3）学科×学年別 クロス集計（1-3 コメント返却）

学科	1 年	2 年	3 年	4 年
日本語	68.9%	78%	76.5%	73.9%

英米語	75%	67.5%	64.5%	83.3%
中国語	85.7%	75%	60%	76%
経済	64.2%	67.9%	67.6%	61.7%
不動産	57.8%	75.7%	48.3%	80%
HT	70.6%	80%	78.6%	75%
口腔保健	65.3%	75.7%	54.5%	63.2%

※ 表の色：緑（90%以上）・青（80～90%）・黄（70～80%）・赤（70%未満）・n<5 のセルは「-」で表示

5. 問3：能力習得感

「大学教育を通じて、次のような知識や能力などが身に付いたと思いますか？」（4段階：①身についた～④身についていない）の各設問についてポジティブ率（①+②）を集計した。

（1）全体ポジティブ率一覧

設問全文	コード	ポジティブ率
専門分野に関する知識・理解	3-1	84.7%
将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観	3-2	81.9%
文献・資料を収集・分析する力	3-3	76%
論理的に文章を書く力	3-4	73.4%
人に分かりやすく話す力	3-5	79.9%
外国語を使う力	3-6	52.2%
数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能	3-7	52.6%
問題を見つけて解決方法を考える力	3-8	78.7%
多様な人々と協働する力	3-9	89.6%
幅広い知識、ものの見方	3-10	84.3%
異なる文化に関する知識・理解	3-11	78.1%

能力習得感では「3-9 協働力」（89.6%）・「3-11 異文化」（78.1%）・「3-1 専門知識」（84.7%）が上位。一方「3-7 数理・統計・データサイエンス」（52.6%）・「3-6 外国語力」（52.2%）が最下位水準で、改善の余地が大きい。

（2）学科×学年別 クロス集計（3-1 専門知識）

学科	1 年	2 年	3 年	4 年
日本語	77.8%	86%	76.5%	95.7%
英米語	86.8%	85%	83.9%	83.3%
中国語	100%	95%	86.7%	96%
経済	68.6%	80%	90.5%	91.5%

不動産	82.8%	87.8%	82.8%	100%
HT	88.1%	90%	96.4%	95.8%
口腔保健	89.8%	97.3%	100%	94.7%

(3) 学科×学年別 クロス集計 (3-7 数理 DS)

学科	1 年	2 年	3 年	4 年
日本語	53.3%	50%	50%	47.8%
英米語	39.7%	47.5%	35.5%	45.8%
中国語	78.6%	60%	53.3%	52%
経済	59%	67.3%	67.6%	63.8%
不動産	44.8%	59.5%	55.2%	64%
HT	43.1%	40%	28.6%	58.3%
口腔保健	57.1%	29.7%	54.5%	33.3%

(4) 学科×学年別 クロス集計 (3-2 仕事スキル)

学科	1 年	2 年	3 年	4 年
日本語	84.4%	86%	79.4%	87%
英米語	77.9%	75%	71%	87.5%
中国語	100%	85%	86.7%	92%
経済	73.8%	73.3%	75.7%	83%
不動産	79.3%	75.7%	89.7%	92%
HT	87.2%	90%	96.4%	95.8%
口腔保健	89.8%	94.6%	100%	94.7%

※ 表の色：緑（90%以上）・青（80～90%）・黄（70～80%）・赤（70%未満）・n<5 のセルは「-」で表示

6. 問4：学び全体の評価

「これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか？」（4段階：①そう思う～④そう思わない）の各設問についてポジティブ率（①+②）を集計した。

（1）全体ポジティブ率一覧

設問全文	コード	ポジティブ率
卒業時まで身に付けるべき知識や能力を意識して学修している	4-1	83.7%
授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている	4-2	60.7%
教職員が熱心に教育に取り組んでいる	4-3	83.8%
大学の学びによって成長を実感している	4-4	81.4%

「4-3 教職員熱意」（83.8%）・「4-4 成長実感（KPI）」（81.4%）・「4-1 目標意識」（83.7%）が高い。「4-2 教育改善」（60.7%）は最も低く、授業アンケートの結果が教育改善に反映されているという実感が学生に届いていないことを示している。単相関分析においても 4-2 は満足度との相関 $r=0.48$ を持ちながら不満足率 39.3%と高く、最優先改善項目として位置づけられる。

（2）学科×学年別 クロス集計（4-2 教育改善）

学科	1 年	2 年	3 年	4 年
日本語	68.9%	64%	79.4%	69.6%
英米語	67.6%	45%	58.1%	50%
中国語	92.9%	65%	60%	72%
経済	59.4%	62.4%	56.8%	74.5%
不動産	57.8%	58.1%	48.3%	68%
HT	59.6%	62%	53.6%	66.7%
口腔保健	42.9%	70.3%	40.9%	56.1%

（3）学科×学年別 クロス集計（4-3 教職員熱意）

学科	1 年	2 年	3 年	4 年
日本語	88.9%	86%	85.3%	91.3%
英米語	95.6%	82.5%	80.6%	87.5%
中国語	100%	100%	86.7%	100%
経済	76.9%	76.4%	86.5%	89.4%
不動産	92.2%	81.1%	79.3%	76%
HT	85.3%	88%	82.1%	95.8%
口腔保健	65.3%	75.7%	77.3%	89.5%

※ 表の色 : 緑 (90%以上) ・ 青 (80～90%) ・ 黄 (70～80%) ・ 赤 (70%未満) ・ n<5 のセルは「-」で表示

7. 単相関分析・優先度分析

Q6 満足度および Q4-4 成長実感と各設問のピアソン相関係数（単相関）を算出した。単相関は「その設問スコアが高い学生ほど KPI も高い傾向の強さ」を表す。全変数で $p < 0.001$ （有意水準 0.1%）。

※ 単相関は 2 変数間の関連の強さを示すものであり、因果関係を示すものではない。設問間の相互相関（多重共線性）が存在するため、重回帰の β 係数は不安定であり解釈には注意が必要。

（1）両 KPI との単相関 一覧

設問全文	コード	Q6 満足度との r	Q4-4 成長実感 との r	Q6 順 位
理解がしやすいように教え方が工夫されていた	1-1	r=0.496	r=0.447	1 位
教職員が熱心に教育に取り組んでいる	4-3	r=0.49	r=0.584	2 位
授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている	4-2	r=0.48	r=0.483	3 位
専門分野に関する知識・理解	3-1	r=0.441	r=0.469	4 位
将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観	3-2	r=0.428	r=0.491	5 位
卒業時まで身に付けるべき知識や能力を意識して学修している	4-1	r=0.425	r=0.497	6 位
文献・資料を収集・分析する力	3-3	r=0.401	r=0.437	7 位
幅広い知識、ものの見方	3-10	r=0.386	r=0.442	8 位
人に分かりやすく話す力	3-5	r=0.383	r=0.413	9 位
論理的に文章を書く力	3-4	r=0.367	r=0.419	10 位
問題を見つけて解決方法を考える力	3-8	r=0.365	r=0.441	11 位
多様な人々と協働する力	3-9	r=0.358	r=0.422	12 位
異なる文化に関する知識・理解	3-11	r=0.356	r=0.381	13 位
質疑応答など、教員等との意見交換の機会があった	1-5	r=0.353	r=0.331	14 位
課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却された	1-3	r=0.337	r=0.295	15 位
ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導があった	1-6	r=0.326	r=0.308	16 位
外国語を使う力	3-6	r=0.308	r=0.309	17 位
予習・復習など授業時間外に行うべき学修が指示された	1-2	r=0.28	r=0.278	18 位
数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能	3-7	r=0.272	r=0.274	19 位

グループワークやディスカッションの機会があった	1-4	r=0.262	r=0.234	20 位
-------------------------	-----	---------	---------	------

Q6 満足度との最強相関は「4-4 成長実感 (r=undefined)」、Q4-4 成長実感との最強相関は「4-3 教職員熱意 (r=0.584)」であった。Q6 との相関上位 (教え方・成長実感) と、Q4-4 との相関上位 (教職員熱意・目標意識・仕事スキル) が異なり、「授業の質は満足度に直結し、能力習得の実感が成長実感を高める」という構造が示唆される。

なお、問 3 (能力習得) の設問は Q4-4 との相関が Q6 より強い傾向があり (例: 3-2 仕事スキル Q6:r=0.43→Q4-4:r=0.49)、問 1 (授業の質) は Q6 との相関の方が強い傾向がある。

(2) 優先度マップ (r×不満足率)

「重要度 (Q6 との単相関 r)」×「不満足率 (100%－ポジティブ率)」の積を優先度スコアとして算出し、4 象限に分類した。境界値: r=0.4 (中程度の相関の目安)・不満足率 25% (4 人に 1 人が否定的)。

設問全文	r	不満足率	ポジティブ率	ゾーン
授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている	r=0.48	39.3%	60.7%	🚩 最優先
理解がしやすいように教え方が工夫されていた	r=0.496	8.1%	91.9%	☑ 強み維持
教職員が熱心に教育に取り組んでいる	r=0.49	16.2%	83.8%	☑ 強み維持
大学の学びによって成長を実感している	r=—	18.6%	81.4%	☑ 強み維持
専門分野に関する知識・理解	r=0.441	15.3%	84.7%	☑ 強み維持
将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観	r=0.428	18.1%	81.9%	☑ 強み維持
卒業時まで身に付けるべき知識や能力を意識して学修している	r=0.425	16.3%	83.7%	☑ 強み維持
文献・資料を収集・分析する力	r=0.401	24.0%	76%	☑ 強み維持
外国語を使う力	r=0.308	47.8%	52.2%	Ⅱ 後回し可
数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能	r=0.272	47.4%	52.6%	Ⅱ 後回し可
ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導があった	r=0.326	37.0%	63%	Ⅱ 後回し可
課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却された	r=0.337	31.4%	68.6%	Ⅱ 後回し可

最優先改善ゾーン (右上): 「4-2 授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている」の

み ($r=0.48$ ・不満足率 39.3%)。

後回し可ゾーン（左上）：外国語力・数理 DS・TA 指導・コメント返却は不満足率が高いが満足度との相関は $r<0.4$ 。放置して良いわけではないが、改善しても満足度全体への波及効果は限定的な可能性がある。TA 指導はそもそも TA が配置されていない授業が多い実態が反映されている可能性がある。

※ 優先度スコア= $r \times$ 不満足率。因果関係は示さず、学科差・学年差も捨象している。境界付近の変数の判定は参考値として扱うこと。

8. 学科×学年 クロス集計 (KPI)

Q6 満足度および Q4-4 成長実感について、学科×学年のクロス集計を行った。各学科の学年進行パターンが異なることが主な発見である。

(1) Q6 満足度 学科×学年別

学科	1 年	2 年	3 年	4 年
日本語	82.2%	88%	84.8%	91.3%
英米語	88.1%	70%	77.4%	73.9%
中国語	100%	95%	80%	100%
経済	79%	80.6%	90.4%	93.5%
不動産	79.3%	71.6%	82.8%	76%
HT	90.7%	88%	89.3%	95.8%
口腔保健	69.4%	81.1%	72.7%	91.2%

(2) Q4-4 成長実感 学科×学年別

学科	1 年	2 年	3 年	4 年
日本語	77.8%	82%	76.5%	82.6%
英米語	83.8%	77.5%	83.9%	75%
中国語	100%	95%	80%	100%
経済	72.9%	75.8%	81.1%	89.4%
不動産	84.5%	74.3%	82.8%	76%
HT	89%	90%	82.1%	79.2%
口腔保健	77.6%	89.2%	90.9%	93%

主な発見：

・口腔保健の満足度は 1 年（69.4%）→4 年（91.2%）と最大上昇幅（+21.8pt）。ただし単調増加ではなく 2 年上昇→3 年低下→4 年急回復という動きを示している。成長実感は 1 年（77.6%）→4 年（93.0%）と単調増加。

- ・英米語は満足度がU字型（88.1%→70.0%→77.4%→73.9%）で2年次に-18.1ptの大幅低下。4年時点で1年次水準に戻っていない。
- ・HTは満足度が4年（95.8%）で最高値なのに対し、成長実感は4年（79.2%）と低下傾向。「満足しているが成長を実感しにくい」という逆転パターン。
- ・経済は満足度が単調増加（79.0%→93.5%）と安定した成長軌跡。

※ n<5 のセルは「-」で表示。小規模学科（特に中国語1年 n=14）の数値は変動幅が大きく解釈は慎重に。

9. クラスタ分析

9 設問（教え方・専門知識・仕事スキル・問題解決・協働力・教育改善・教職員熱意・成長実感・満足度）の回答パターンに基づき、K-means 法（k=3）でクラスタリングを実施した。シルエットスコア k=3（0.211）は k=4（0.170）を上回り、統計的にも 3 分類が支持される。

クラスタ	高満足群	中満足群	低満足群
人数・比率	503 名 (33.1%)	749 名 (49.3%)	266 名 (17.5%)
Q6 満足度	99.4%	89.9%	33.1%
典型回答	9 設問の大半に①	9 設問すべて②	満足度・成長実感・能力 習得系に③

低満足群（266 名・17.5%）は成長実感（24.1%）・教育改善実感（18.4%）・教職員熱意（43.2%）の評価が特に低い。授業の質（教え方 63.2%）より「成長できている実感」「大学が良くなっている実感」の欠如が満足度を下げていることが示唆される。

学年進行とともに低満足群の比率は減少する傾向がある（1 年 18.5%→4 年 11.7%）。経済（22.4%）で低満足群の比率が相対的に高い。

※ クラスタ名（高満足・中満足・低満足）は事後的な命名であり解釈の恣意性を含む。カリキュラム設計・授業改善・学修環境整備の参考情報として活用する。

10. 前年度比較（2024 年度→2025 年度）

主要設問について前年度（2024 年度）との比較を行った。2024 年度の設問番号は本報告書とは異なる（28 が満足度、26 が教職員、27 が成長実感に相当）。

（1）設問別ポジティブ率の変化（全体）

設問	2024 年度	2025 年度	変化
Q6 大学での学びに満足している	80.9%	83.1%	+2.2pt
4-4 大学の学びによって成長を実感している	77.9%	81.4%	+3.5pt
4-3 教職員が熱心に教育に取り組んでいる	83.9%	83.8%	-0.1pt
4-2 授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている	57.1%	60.7%	+3.6pt
1-1 理解がしやすいように教え方が工夫されていた	89.2%	91.9%	+2.7pt
3-1 専門分野に関する知識・理解	88.0%	84.7%	-3.3pt
3-7 数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能	44.5%	52.6%	+8.1pt

主要 KPI である満足度・成長実感はいずれも前年度比で改善した。4-2 教育改善実感も+3.4pt の改善があったが、全体平均 60.7%と依然として最低水準にある。

※ 前年度（2024 年度）の集計値は IR 推進本部の 2024 年度レポートより引用。設問番号の対応関係は別途確認のこと。比較可能な設問のみを掲載。

1 1. むすびと今後の課題

(1) 主な発見事項

- ① KPI (Q6 満足度 83.1%・Q4-4 成長実感 81.4%) は全体として高水準を維持しており、前年度比でも改善が確認された。
- ② 満足度との最強相関は「成長実感 ($r=0.60$)」、成長実感との最強相関は「教職員熱意 ($r=0.58$)」であった。「面倒見の良さ」が本学の強みとして引き続き確認される。
- ③ 「4-2 授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている」は最優先改善項目 ($r=0.48$ ・不満足率 39.3%)。授業改善の取り組みを学生に可視化して伝える仕組みが必要。
- ④ 「3-7 数理 DS」(52.6%)・「3-6 外国語力」(52.2%) は不満足率が約 48% と高い。満足度への影響はやや限定的だが、能力育成の観点から継続的な改善が求められる。
- ⑤ 学科間では、中国語 (満足度 94.6%・成長実感 94.6%) が両 KPI で最高、不動産 (満足度 77.0%)・経済 (成長実感 76.5%) が最低となっている。HT は満足度が高い一方で成長実感が学年進行とともに低下する逆転パターンが確認された。

(2) 今後の課題

- ① 4-2 (授業アンケートを通じた教育改善の可視化) への対応：学生が実感できる形での改善事例の共有が必要。
- ② 3・4 年生の回収率向上：ゼミ・卒業研究の時間を活用した回答促進の継続。
- ③ 英米語学科の学年進行パターン (2 年次に大幅低下) の要因把握と対策。
- ④ 成長実感と満足度の乖離が見られる学科 (HT・日本語・経済) における学習体験の質的改善。

以 上